

黙示録3章1-6節 「無気力な教会」

1A 御霊と教会を持つ方 1a

2A 名ばかりのいのち 1b-3

1B 死んでいる内実 1b

2B 目覚め 2

1C 残りの者たちへの励まし

2C 完了していない行い

3B 悔い改め 3

1C 聞いたことの思い起こし

2C 盗人のような来臨

3A 衣を汚さなかった者たち 4-6

1B 白い衣の着用 4

1C 衣を汚さない者

2C 主との歩み

2B いのちの書 5

1C 消されない名

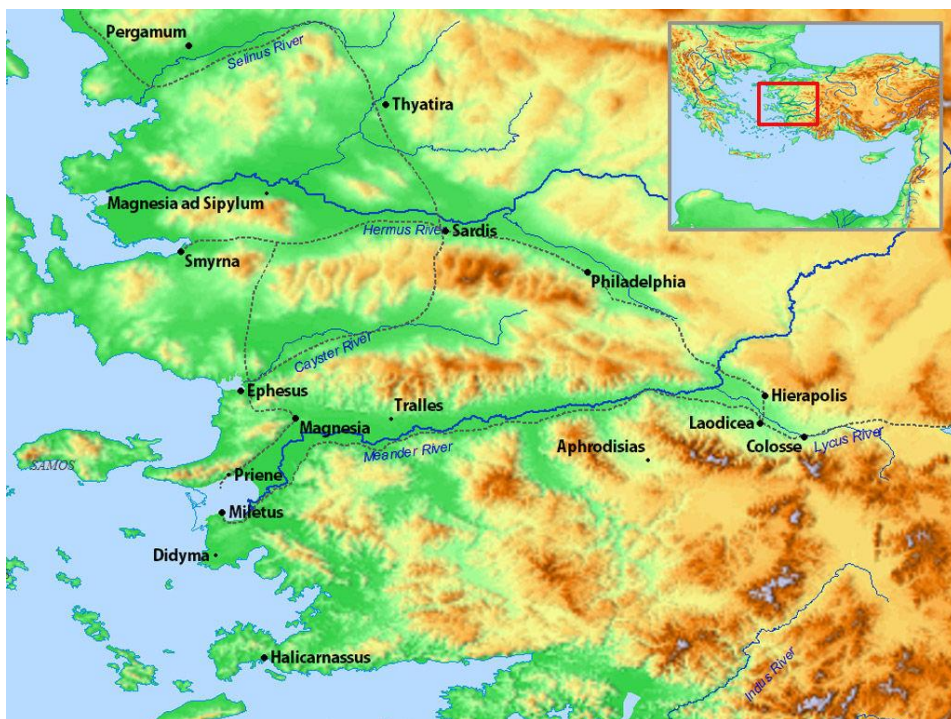
2C 御前での言い表し

3B 御霊の告げられること 6

本文

黙示録3章を開いてください。イエス様の、七つの教会に対する言葉の五つ目の教会です。エペソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラの次、サルデイスです。「¹ また、サルデイスにある教会の御使いに書き送れ。『神の七つの御霊と七つの星を持つ方が、こう言われる—。わたしはあなたの行いを知っている。あなたは、生きていたとは名ばかりで、実は死んでいる。² 目を覚まし、死にかけている残りの者たちをカづけなさい。わたしは、あなたの行いがわたしの神の御前に完了したとは見ていない。³ だから、どのように受け、聞いたのか思い起こし、それを守り、悔い改めなさい。目を覚まさないなら、わたしは盗人のように来る。わたしがいつあなたのところに来るか、あなたには決して分からない。⁴ しかし、サルデイスには、わずかだが、その衣を汚さなかった者たちがいる。彼らは白い衣を着て、わたしとともに歩む。彼らがそれにふさわしい者たちだからである。⁵ 勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。またわたしは、その者の名をいのちの書から決して消しはしない。わたしはその名を、わたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す。⁶ 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。』」

サルディスは、ティアテ
イラからさらに南東に約
50 km内陸に入ったところ
にある町です。古代に
は、紀元前 7 世紀のリュ
ディア王国の首都です。
アジアの中心地である、
エペソ、スミルナ、ペルガ
モンからの街道が交わる
ところにあります。内陸か
らエーゲ海に通じる重要
な街道の途上にあるとい
うことで、一つに軍事的
な要所となっていたこと、
もう一つは通商の要所
にもなっていました。そして



サルディスには広大な平野が広がっていて、そこを支配できるという利点もありました。それで、膨大な富が集まり、最後の王クロイソスは「富める者」と同義語になっていました。

美術工芸に優れていて、金銀の貨幣を初めて鋳造したのもサルディスです。そして、ティアテイラと同じように、染料や繊維でも有名でありました。後で、「白い衣」を主が与えるという約束があります。それから、他のアジアの町々と同じように、偶像礼拝に濃厚でした。キュベレーという、地母神が拝まれていましたが、それは性的な乱交儀式が特徴で、道徳的に非常に乱れた町でもありました。そのキュベレー神殿の跡地に、後にサルディスはエペソの女神アルテミスの神殿を建てます。

サルディスに特徴的なのは、トロモス山の山裾の陰しい高い尾根に、アクロポリス(城砦)を建てたことです。これだけの自然要害は珍しく、難攻不落とされていました。ところが、あっけなく敵の手に落ちた歴史を持っています。しかも一度だけではありません。

ペルシヤのキュロス王がクロイソスが王座を示すこの町を包囲したのですが、どこからも攻め上ることのできる隙がないように見えました。城砦の中に突破口を見つけた部隊には、大きな報酬を約束していました。ある兵士が、じっくり見ていると、城壁の上から、兜を落としてしまった者が何の苦労もなく下に降りてきて、それからまた上がっていく姿を見たのです。つまり、隠れた坂道がそこら辺にあるということです。それで秘かに精鋭部隊にそこから侵入するべく、その山道を上っていったところ、城壁のところまで来ました。ところがだれも護衛していません。サルディスの兵士たちは、自然要害に自信を持っていたので、目を覚まして見張る必要を感じていなかったのだ

す。こうして、いとも容易くこの町を征服したのです。そして二百年後、同じようにしてギリシアのアレクサンドロス大王が攻め取りました。

サルデイスのアクロポリス(自然要害)。手前はアルテミス神殿跡



このような歴史を持つサルデイスにある教会は、イエス様のこの言葉を聞いて、ずっしり来たことでしょう。「あなたは、生きているとは名ばかりで、実は死んでいる。」自然の要害によって、自分たちは生きていると思っていた彼らが、殺されてしまったのと同じように、霊的に眠っており、死んでしまっているのだとイエス様は指摘されたのです。

1A 御霊と教会を持つ方 1a

¹ また、サルデイスにある教会の御使いに書き送れ、『神の七つの御霊と七つの星を持つ方が、こう言われる—。

イエス様は、ご自身を「神の七つの御霊と七つの星を持つ方」と言い表されました。それぞれの教会に対して、ヨハネに現れたお姿の一部を紹介しておられるのですが、サルデイスにある教会に対しては、七つの御霊と七つの星、すなわち、神の御霊をもって、諸教会全体を支配しておられるのだということをお話しになっているのです。「七」は神の数字で完全であることを示します。教会とは、神の御霊がおられるところです(1コリ 3:16) 私たちが絶えず、神の御霊に拠り頼み、この方の声を聞き、導きを受け、そして御霊の下さる賜物を用いて神に仕えます。御霊によって、私た

ちは教会が教会として生きることができます。

2A 名ばかりのいのち 1b-3

1B 死んでいる内実 1b

^{1b} わたしはあなたの行いを知っている。あなたは、生きているとは名ばかりで、実は死んでいる。

他の教会に対してと同じように、主はサルデイスの教会の行いを知っておられます。主からは何も隠すことはできない、すべての行ないを知っておられます。これまでの教会は、イエス様は、ほめるために人目につかないことについて、「知っている」と言われていました。エペソの教会に対しては、労苦や忍耐があり、ご自分の名を否まなかった。スミルナの教会に対しては、苦しみと貧しさを知っている、ペルガモンの教会に対しては、サタンの王座があるのにそれでも信仰を捨てなかった。ティアティラの教会に対しては、「あなたの愛と信仰と奉仕と忍耐を知っている」と言われました。ところが、ここでは称賛ではなく、責める言葉として、知っていると言われます。「生きているとは名ばかりで、実は死んでいるのを知っている」ということです。これは、かなり深刻なことでありま。ほめるべきところがあるが、欠けがあるのでそれを悔い改めなさいというのと、教会全体が主ご自身から離れてしまっているというのは大きな違いです。

「生きているとは名ばかり」ということ、そういった評判があるということ。ですから今、サルデイスの教会があれば、「すごいじゃないか、生きた教会ではないか。」と見えるのです。しかし、実はそうではない。良い評判があるからといって、そこが御霊の命を持っている教会とは言えないのです。活動が多くあって、にぎやかな礼拝賛美があって、キリスト教の世界の中ではよく知られていて、誰もが知っているというような場合でも、本当は死んでいるということはありません。あるいは、教えにおいてはとても正しくて、健全であると言われる教会が、その内実は死んでいる、ということがあります。

何をもって、死んでいるのか？これまでの教会を見れば、明らかです。エペソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラの教会ですが、スミルナを除いてイエス様は全てに責めるべきことがある、と言われます。けれどもイエス様の名を保っていることによる、戦い、あるいは葛藤がありました。信仰の戦いが、その異教の文化や物質的豊かさの中で熾烈なものがあつたのです。その中で妥協をしたり、あるがままにしていたり、という問題はありましたが、戦いや葛藤があることが前提でした。しかしイエス様は、その信仰の戦いをしなさいとスミルナにある教会に対して、励ましておられません。なぜなら、「もう死んでしまっている」からです。つまり、周りの文化との対立する接点がない、ということでもあります。もう死んでしまった兵士に対して、敵兵は銃を撃つ必要はありません。戦いや葛藤がない、ということです。「なんとなく満足していて、特に何かすべきことはない」という霊的な無感覚、無気力は、悪魔にさえ相手にしてもらえない死んだ状態であると言えます。

戦いがない時が、実は最も危険であるとも言えます。その時に慢心するのです。高慢になるのです。日本ではしばしば、平和ボケという言葉が使われますが、戦いがなかったので、高ぶって自分たちがどうなっているのかに盲目になっていることがあります。士師の時代のことを思い出してください。ヨシュアたちが、約束の地に入り、カナン人たちと戦い、攻め取っていきました。けれども、すべての人を追い出さませんでした。そして、戦うことをやめ、共に暮らしました。そうすると、次に、彼らはカナン人たちの偶像、バアルやアシェラを拝み、仕え始めたのです。それで、主は彼らに虐げられるままにされました。こうあります、「士 3:1-2 次が、【主】が残しておかれた異邦の民である。主がそうされたのは、カナンでの戦いを全く知らないすべてのイスラエルを試みるためであり、2 ただ、イスラエルの次世代の者、特にまだ戦いを知らない者たちに、戦いを教え、知らせるためであった。」このように、戦いをやめる時ほど、立ち止まった時ほど危険あのです。

これまでの学びの中で少しずつ触れましたが黙示録2章と3章に出てくる七つの教会を、全教会史の七区分として見る見方もあります。エペソの教会が、使徒たちが生きていた時の教会であり、スミルナがローマによる激しい迫害を受けた初代教会時代。ペルガモンが、キリスト教が国教化された時代であり、次にティアティラが、中世の暗黒時代に匹敵するという見方です。そして、サルディスの教会は、霊的に墮落した教会に対して異議を申し立てたマルチン・ルターから始まった、プロテスタントの教会、あるいは宗教改革の時代と見ます。そしてもちろん、私たちの教会はプロテスタントの教会です。

宗教改革には三本柱がありました。一つ目の柱は、「信仰による義」です。秘跡と呼ばれる、数々の儀式を通ることによって、神の国に入れるとしてカトリックに対して、ただキリストを信じる信仰によって救われるとしました。二つ目の柱は、「聖書のみ権威」です。カトリックは教会と聖書の権威を同列に置き、教会の伝統を聖書と同じように大切にしました。しかし、聖書こそが最高権威であり、私たちの信仰や生活の唯一の基準であるとしました。そして三つ目の柱は、「万人祭司」です。カトリックは司祭を通してイエス・キリストに近づき、そして父なる神に近づくという、仲裁的な務めを持っていますが、だれもがキリストを通して、父なる神に近づくことができる、としました。

このような三つの柱を持って、プロテスタントの教会は成り立っていますが、私たちは今の話を、「当たり前なこと」「いつも聞いていること」として受けとめられると思います。けれども、実際上の話はどうなっているのでしょうか？信仰によってのみと言いながら、何か条件がないと神に認められていないと感じたりしないのでしょうか？そして、「権威は聖書のみ」と言いながら、実際上は聖書ではなく、誰かに言われたことを盲目的に従っていることがあります。それから、「万人祭司」についても、伝道を牧師に任せ、自分は奉仕しないとするのならば、祭司的な働きをしていないこととなります。宗教改革の内容は、だれもが賛同しているのですが、名目だけになっていて、実質がそうになっていないということです。名目だけでなく、絶えず、自分たちが御霊の力によって改革され続けるというのが、正しい姿勢です。ですから、そこには葛藤があり、不断の努力があり、日々、御霊によ

って変えられている、というのがあつたのです。

2B 目覚め 2

² 目を覚まし、死にかけている残りの者たちを力づけなさい。わたしは、あなたの行いがわたしの神の御前に完了したとは見ていない。

死んでいる彼らに対して、イエス様は、「目を覚まし」なさいと言われます。主は何度となく、私たちにこの命令を与えられました。それは、悪魔による攻撃が激しい時に、その戦いの中で、次に来ることをしっかりと見ていなさいという意味合いで使われています。ゲッセマネの園において、「マタ 26:41 誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。霊は燃えていても肉は弱いのです。」と言われました。彼らは目を覚ましていなかったので、イエス様を捕える者たちが来た時に逃げてしまい、ペテロはイエス様を三度、否みました。霊的に、目を覚ましている時は祈ることが必要です。「コロ 4:2 たゆみなく祈りなさい。感謝をもって祈りつつ、目を覚ましていなさい。」

そして再臨においてその終わりの日における困難においても、目を覚ましていなさいと主は言われます。「1テサ 5:6-9 ですから、ほかの者たちのように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいましょう。7 眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うのです。8 しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛の胸当てを着け、救いの望みとかぶとをかぶり、身を慎んでいましょう。9 神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。」イエス様は、オリーブ山で、終わりのしるしについて語られた後に、ご自身が来られるのがいつの日か分からないのだから、目を覚ましていなさいと命じられていますね。忠実な僕と愚かな僕の喩え、それから十人の娘の、賢い娘と愚かな娘の喩えを語られました。

1C 残りの者たちへの励まし

そして、「死にかけている残りの者たちを力づけなさい」と言われます。これは、主を三度否むペテロに対して、前もって、「ルカ 22:32 しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。ですから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」と言われたのと同じです。自分自身が死んでいることに目を覚ますこと。そして、主に立ち直ること。そして、立ち直ったら、多くのつまずいてしまっている兄弟たちを力づけることです。

2C 完了していない行い

そしてなぜ眠ってしまうのか？「わたしは、あなたの行いがわたしの神の御前に完了したとは見ていない。」ということです。逆に言うと、全うしたという慢心があるということです。サルデイスの城砦が堅固であるように、自分も霊的には大丈夫だと安心sひていることです。あるいは、信仰の競走を走っているのに、自分は目標にたどり着いていないのに、もう大丈夫だ、ほとんど走ったのだからと言って、立ち止まってしまうことです。私は悪い癖で、ほとんど何かを終わらせると、あと少し

残して、他のことをしてしまいます。集中力が続かないことがあります。けれども、あと一步のところに目標があるのですから、完走する必要がありますね。

霊的には、これは致命的です。ちょうど血流が止まるようなもので、血液や流れているからこそ酸素を送り込むことができるのであり、血があることそのものが命をもたらしているではありません。途中で完成したと思った人で、ヤコブがいます。ラバンとの確執がありそこを流れ、次にエサウと会う時に、御使いとの格闘があり、イスラエルとの名が与えられました。そして彼はヨルダン川を渡り、主が会ってくださったところ、ベテルに行かなければいけないのに、その途中の町シェケムで滞在し、自分の名を記した記念碑まで作ったのです。その結果、シェケムの主の息子から娘ディナが凌辱を受けました。そしてそこから出て行く時は、いつの間にか異教にまつわる物を身に付けていました。主は、「ベテルに上りなさい」と命じられます。

私たちは完成されていません。いつまでもキリストの十字架に寄り添って、自分は罪に対して死んでいたけれども、キリストが甦らせてくださったことを知り、そこから主と共に歩む必要があります。主が戻って来られるまで、その競走を走りぬくのです。「ピリピ 3:12-14 私は、すでに得たのもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして追求しているのです。そして、それを得るようと、キリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。13 兄弟たち。私は、自分がすでに捕らえたなどと考えるとはいません。ただ一つのこと、すなわち、うしろのものを忘れ、前のものに向かって身を伸ばし、14 キリスト・イエスにあって神が上に召してくださるといふ、その賞をいただくために、目標を目指して走っているのです。」

3B 悔い改め 3

1C 聞いたことの思い起こし

³ だから、どのように受け、聞いたのか思い起こし、それを守り、悔い改めなさい。目を覚まさないなら、わたしは盗人のように来る。わたしがいつあなたのところに来るか、あなたには決して分からない。

悔い改める必要があります。どのように、悔い改めるかという、「生きているというのは名ばかり」という問題がありました。自分が生きているとされていること、つまり、かつて、福音のことばを受けて、聞いていることがあります。それを思い起こして、守るということで悔い改めることができます。原点に戻ると言ってもよいでしょうか？

聖書には、初めに聞いたこと、受けたことを最後まで保つことを教えています。「ヘブル 3:13-14 「今日」と言われている間、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされて頑なにならないようにしなさい。14 私たちはキリストにあずかる者となっているのです。もし最初の確信を終わりでしっかり保ちさえすれば、です。」ヨハネは、第一の手紙でこう言っています。「2:7-8 愛する者たち。

私があなたがたに書いているのは、新しい命令ではなく、あなたがたが初めから持っていた古い命令です。その古い命令とは、あなたがたがすでに聞いているみことばです。8 私は、それを新しい命令として、もう一度あなたがたに書いているのです。それはイエスにおいて真理であり、あなたがたにおいても真理です。闇が消え去り、まことの光がすでに輝いているからです。」そして、しっかりとそれを守ります。「Ⅱテモ 1:13-14 あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛のうちに、私から聞いた健全なことばを手本にしなさい。14 自分に委ねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって守りなさい。」

2C 盗人のような来臨

そして、厳しい警告がここにはあります。もし、悔い改めなかったらどうなるのか？目を覚ましていなければどうなるのか？「わたしは盗人のように来る。」であります。主はご自身が再臨されるにあたって、何度となく、「盗人のように来る」と言われました。それは予期せぬ時に来る、ということです。「マタイ 24:43-44 次のことは知っておきなさい。泥棒が夜の何時に来るかを知っていたら、家の主人は目を覚ましているでしょうし、自分の家に穴を開けられることはないでしょう。44 ですから、あなたがたも用心していなさい。人の子は思いがけない時に来るのです。」

私たちの社会は、主の再臨が近づくにつれて、このように予期せぬようなことが今までより頻繁に来るようになります。愚かな娘と賢い娘の違いは、前もって油を用意していたかどうか、でありましたが、前もって用意していないと、その霊の戦いの激しさの中で、ただ感情的に反応してしまい、心が傷を受けるだけで、御心に沿って祈り、行動することがとても難しくなります。そして、自分を守ろうとして、もがけばもがくほど、キリストと福音ではないところに何かを求めていき、後で強く失望するのです。ちょうど、十字架にキリストが向かわれるのに、主の御座の右や左で誰が着座するのか議論していて、その数日後に、主から逃げてつまずいた弟子たち、のようになります。

そして、主が盗人のように来られれば、備えのない者たちは裸を見られるようにして大きな恥を受けるとあります。ハルマゲドンの戦いについて主が語られる時に、「黙 16:15 ——見よ、わたしは盗人のように来る。裸で歩き回って、恥ずかしい姿を人々に見られることのないように、目を覚まして衣を着ている者は幸いである——」と言われていました。裸で歩くのを見られるというのは、暗闇の行ないをしていて、それが明るみに出されるということがあるでしょう。

3A 衣を汚さなかった者たち 4-6

1B 白い衣の着用 4

⁴しかし、サルデイスには、わずかだが、その衣を汚さなかった者たちがいる。彼らは白い衣を着て、わたしとともに歩む。彼らがそれにふさわしい者たちだからである。

「しかし」という言葉から始まる、勝利を得る者たちへの励ましの言葉です。サルデイスの教会の

深刻さがあります。ペルガモンやティアテラの教会においては、妥協する者たちが幾人がいるとか、なすがままにさせているとかの叱責の言葉でありましたが、こちらは、まともな人々が幾人かいる、ということです。逆に言うと、大多数が主から離れており、主が盗人のように来られて、恥を見るのですが、わずかに主の内にいる人々がいる、ということです。

1C 衣を汚さない者

ここで主は、「衣」について話されます。これは織物や染料で有名なサルデスには、分かり易い話だったでしょう。これは、キリストにある新しい歩みについて語っている言葉です。「エペソ 4:22-24 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言えば、人を欺く情欲によって腐敗していく古い人を、あなたがたが脱ぎ捨てること、23 また、あなたがたが霊と心において新しくされ続け、24 真理に基づく義と聖をもって、神にかたどり造られた新しい人を着ることでした。」サルデスにある、異教や不品行、富への執着など、そうした汚れに対して、自分もその中にいることによって順応していった人たちは、衣を汚してしまっています。けれども、そうではなく、神の聖と義にかたどられた新しい人を身に付けて、それに従って生きようとしている人々は、汚していません。

2C 主との歩み

主は、そのようにしている者たちに、「わたしとともに歩む」と約束してくださっています。自分自身の力によって、聖く生きることなど決してできません。聖霊の助けによって、白い衣を保つことができ、そして主との歩みを確立できます。歩むというのは、夫婦が同じ人生を共に歩んできたというのと同じように、交わり、分かち合い、共有してきた、生活をいっしょにしてきたという親しみを言い表しています。エノクがそういう人でしたね、「創世 5:24 エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。」イエス様と共に歩み、そして主によって天に引き取られる、という生活です。

2B いのちの書 5

⁵ 勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。またわたしは、その者の名をいのちの書から決して消しはしない。わたしはその名を、わたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す。

黙示録には、「白い衣」が数多く出てきます。主ご自身の思いの中に、私たちが聖なる者となること、清められていることがとても大事なものであることを教えています。例えば、7章 14節、「この人たちは大きな患難を経た者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」小羊の血、キリストの血によって私たちが心が清められ、そして生活にも清さが表れます。これが白い衣であり、キリストが戻って来られる時には、この体そのものも変えられ、キリストに似た者になるのです。

1C 消されない名

そして大事な約束があります。他の教会に対しても主は約束されましたが、「確かにあなたは永

遠の命を受け継ぐのだ」という保証です。これまでは、例えば、「2:7 勝利を得る者には、わたしはいのちの木から食べることを許す。それは神のパラダイスにある。」であるとか、「決して第二の死によってそこなわれることはない。(2:11)」であるとか、ありました。ここでは、自分の名がいのちの主に書き記されているという事実です。名が書かれていることについては、新しい名が記されているということで、ペルガモンにある教会でも約束されていました(2:17)。

神には、ご自分のものとする者たちをご自分の書物に書き記しているという事実を覚えるべきです。地上で獣、すなわち反キリストを拝む者たちが後に出てきますが、「13:8 地に住む者たちで、世界の基が据えられたときから、屠られた子羊のいのちの書にその名が書き記されていない者はみな、この獣を拝むようになる。」とあります。反キリストを受け入れるのです。けれども、最後の審判において、主は名の記されていない者たちを火と硫黄の池に投げ込まれます。「20:12-15 また私は、死んだ人々が大きい者も小さい者も御座の前に立っているのを見た。数々の書物が開かれた。書物がもう一つ開かれたが、それはいのちの書であった。死んだ者たちは、これらの書物に書かれていることにしたが、自分の行いに応じてさばかれた。13 海はその中にいる死者を出した。死とよみも、その中にいる死者を出した。彼らはそれぞれ自分の行いに応じてさばかれた。14 それから、死とよみは火の池に投げ込まれた。これが、すなわち火の池が、第二の死である。15 いのちの書に記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた。」したがって、名が消し去られない、という約束はとても貴いものであり、これに私たちが集中しているべきだということを感じるべきでしょう。私たちは、この地上において、信仰の戦いがあらゆる面であります。そして何が大事かを優先順位が崩れてしまうことがあります。身近にある困難や苦しみから解き放たれるのが目的なのか、それとも、命の書に自分の名が書き記されていることが目的なのか？

2C 御前での言い表し

そして、最後の審判において、主イエスは父なる神に対して、私たちが一人一人を、「この者は、わたしは知っています。」と言われるのです。もしそれをしてくださらないなら、神の前から退かれます、神の国の住民ではないですから、追い出されるのです。ですから、主が私を知っていると言ってくださいことは、とても必要なのです。イエス様は福音書で、同じように私たちがイエス様を人の前で認めることを教えておられます。「ルカ 12:8-9 あなたがたに言います。だれでも人々の前でわたしを認めるなら、人の子もまた、神の御使いたちの前でその人を認めます。9 しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、神の御使いたちの前で知らないと言われます。」私たちが、イエス様を知っているでしょうか？親しく知っているでしょうか？そして、その親しい関係が、他の人々の前でも認めるように確立しているでしょうか？最後の審判のところ立つ時、イエス様も私たちが知っている、と言ってくださいます。

3B 御霊の告げられること 6

⁶ 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。』

すべての七つの教会にあるように、これは単にその地域教会のみならず、全歴史の、全教会に対して主が御霊によって語っておられる言葉です。私たちの教会にも語られました。

